

明治後半期の渡米熱—アメリカの流行

立川 健 治

【要約】 明治三〇年代半ばから明治四〇年代にかけて、多くの人々が渡米に関心をもち、実際に渡米していった。渡米を奨励する数多くの本が出版され、渡米協会・力行会といった渡米奨励団体も活況を呈し、新聞・雑誌でも渡米情報がかなり掲載されていた。移民の最適地アメリカ、渡米すれば稼げて学べて洋行帰りとなる、といったイメージが語られ、人々の関心をひいたのである。そして、当時のいわゆる成功ブームのなかで、カーネギー・ルーズベルトがヒーローとしてもはやされ、実力次第の機会と成功の社会アメリカといったイメージも、大量にふりまかれていた。こういった渡米論やアメリカのイメージには、日本の社会状況への満たされぬ思いや息苦しさが倒錯されていた。さらに、この渡米論やアメリカのイメージを別の角度からみれば、日本人のアメリカに対する劣等感や屈辱感、そして反発が、そこには封じこめられていた。これらを露出させることになったのが、日露戦争後の日本人排斥運動・黄禍論の台頭だったのである。

史林 六九卷三号 一九八六年五月

1 はじめに

渡米が立志や成功と同義のように考えられ、実際に数多くの者が渡米し、そしてまた移民・殖民といえ、何よりも渡米を指していた時代があった。渡米は商売ともなりたつた。明治三〇年代から明治四〇年代にかけてのことである。

明治三四～五年を境として、表1にあげたように、渡航手続き・上陸後の就労や就学・アメリカの社会の紹介等をセールスポイントとした数多くの渡米奨励本が出版され、多くの読者を獲得するようになった。渡米協会・力行会といった渡米奨励・斡旋を売り物とする団体が、明治三五～六年頃から活況を呈し始め、のちには、『渡米雑誌』・『渡米新報』という機

表 I 明治後半期の渡米奨励本

刊年月	著者	書名	出版者(値段)	発行
明治33. 4	渡辺 四郎	英語會話と職業編	堂本商会 (1円75銭)	明治39年増補 8版
明治34. 8	渡辺 四郎	ハワイアメリカ出稼出世の宝		
	片山 潜	渡米案内	労働新聞社(15銭)	明治42年増訂14版
	一柳松庵(讓二)	渡米の葉		明治37年増訂 4版
	島貫兵大夫	最近正確渡米案内大全	中庸堂 (30銭)	明治40年 2版
明治35. 1	尚米同志会	渡米之葉	(非売品)	
	渡辺 四郎	海外立身の手引	雲梯舎 (25銭)	明治40年改訂増補 6版
	飯島栄太郎	米国渡航案内	博文館 (40銭)	明治37年 2版
	清水鶴三郎	米国労働便覧		
	相島勘次郎 佐藤政治郎	渡米のしるべ	岡島書店 (25銭)	明治38年増訂15版
	山岸 幹	米国布哇渡航問答	宝文館 (25銭)	
	吉村大次郎	最近視察青年の 苦学生の天国 渡米	中庸堂 (35銭)	明治38年 5版
	渡辺勘次郎	海外出稼案内	内外出版 (20銭)	
	片山 潜	続渡米案内	渡米協会 (15銭)	明治39年増訂 4版
明治36. 2	吉村大次郎	渡米成業の手引	岡島書店 (25銭)	この年数版
	石塚猪男蔵	現今渡米案内	石塚書舗	
	吉村大次郎	独立北米遊学案内 自給	岡島書店 (25銭)	
	河上 清	米国書生気質 男女	言文社 (30銭)	
	奥宮 健之	北米移民論	明義舎 (30銭)	
	吉村大次郎	北米テキサス州の米作	岡島書店 (35銭)	
	星 一 編	米 国 万国博覧會渡 聖路易 航案内	日米週報社(25銭)	
	星野 徳治	苦学異郷之客 独歩	警醒社 (35銭)	
明治37. 1	宮本勘次郎	新渡米	出版協会 (15銭)	明治39年11版
	藤本 西州 秋 広 秋 郊	海外苦学案内	博報堂 (30銭)	
	桜府 隠士	在米成功の日本人	宝文館 (35銭)	直後 2版
	力行会 編	最近渡米策	力行会 (35銭)	明治38年 4版
	天野寅三郎	渡米羅針	東京交誼社	
明治38. 2	林 引之	渡米會話	石塚書舗 (30銭)	
	岡田 溪水	米国事情		この年 5版
	宮本勘次郎	続新渡米	出版協会 (15銭)	明治39年 4版
	吉村大次郎	テキサス州米作の実験	岡島書店 (20銭)	
	島貫兵大夫編	実地渡米	力行会 (12銭)	明治41年 4版
	岩崎勝三郎	最新渡米案内	大学館 (20銭)	
	安部 磯雄	北米之新日本	博文館 (35銭)	
	木村 竹葉	新渡米案内	盛光堂 (20銭)	
明治39. 4	北沢寅之助 成沢金兵衛	新撰渡米案内	博文館 (30銭)	明治45年増補 8版

明治後半期の渡米熱—アメリカの流行（立川）

明治39.	7	山根 悟一 編	最近渡米案内	渡米雜誌社(30銭)	明治40年 4 版
"	"	片 山 潜	渡米之秘訣	出版協会	
	10	河村鉄太郎	最近活動北米事業案内	博文館 (38銭)	
明治40.	1	梅田又次郎	在米の苦学生及労働者	実業之日本社 (30銭)	*アメリカでは『在米者成功之友』
明治41.	5	田畑喜三郎	渡米者成功之友	清水書店	
	8	秋吉辰次郎	新撰渡米者必携	(40銭)	大正 5 年12版
明治44.	6	島貫兵太夫編	力行奮闘録	博文館 (25銭)	
	9	盛文社編輯部編	海外立身案内	盛文社 (27銭)	
	12	島貫兵太夫	新渡米法	博文館 (40銭)	
明治45.	4	植村 寅 編	渡米者必携米国情	内外出版協会	

- 片山潜『渡米案内』の発行—1週間で2,000部直後再版→明治34年10月3版→同年12月4版→明治35年4月増訂5版→同年9月6版→明治36年4月7版→同年5月8版→同年10月9版→明治37年3月10版→同年5月11版～明治42年6月14版
- 相島勘次郎・佐藤政治郎『渡米のしるべ』の発行—明治35年10月25日2版→同年11月10日3版→同年11月25日4版→明治36年1月20日5版→同年2月25日6版→同年3月20日7版→同年4月5日8版→同年4月20日9版→同年6月11日10版→同年9月15日増訂11版→明治38年11月増訂15版

*版については、本の與付や新聞・雑誌・本掲載の広告等を参照した。

*著者のなかで、本の内容からみて、渡米体験のない者は、山岸幹・石塚猪男蔵・天野寅三郎・岩崎勝三郎の四名と思われる。

*これ以外にも渡米奨励本は出版されていたが、直接目を通したものを掲載した。

関誌も月刊で発行するようになった^①、『北米ワシントン・英領コロンビア州日本人事情』（石岡彦一 古屋商店 明治四〇年）『在米同胞発展史』（加藤十四郎 博文館 明治四二年）といった一種の在米日本人史も、明治四〇年代に入る頃には出版されるようになった。明治三〇年代半ば頃から、『大阪毎日新聞』・『成功』を始めとした数多くの新聞・雑誌も、渡米関連記事・論文を掲載するようになった^②。渡米が社会的関心をひきおこしていたのである。

そして明治三〇年代半ばから日露戦争後のいわゆる成功ブームのなかで、カーネギー・ルーズベルト・マードンの翻訳ものがベストセラーとなり、雑誌や新聞でもその名はひんぱんに登場していた。さらに、『米国観』（原田豊次郎 有朋館 明治三六年）・『北米無銭渡航』（天涯帰着 大学館 明治三九年）・『北米世俗観』（田村松魚 博文館 明治四二年）・『米国見物』（正岡芸揚 昭文社 明治四三年）・『米國苦学雜記』（形影生 内外出版協会 明治四四年）といったアメリカ論から冒険小説の類いものも多く刊行されていた。明治三〇年代から明治四〇年代にかけて、さまざまなアメリカの流行と結びつく形で、渡米熱は高まっていたのである。

表Ⅱ 明治30年代における渡米者の概数に関する参考資料

1 年次別・地域別・邦人移民数

地域	年次	明治30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
北米等		8,064	16,929	30,397	15,609	5,841	15,443	9,965	10,263	11,764	29,579
中南米				791	1	95	83	1,710	1,261	346	6,325
東南アジア				166	1,148	554	393	2,380	3,139	1,192	220
計		8,064	16,929	31,354	16,758	6,490	15,919	14,055	14,663	13,302	36,124

外務省領事移住部『わが国民の海外発展』資料編 昭和46年
若槻泰雄・鈴木譲二『海外移住政策史論』福村出版 昭和50年 所収 55頁による。

2 渡米者数

年次	明治30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
本土	1,526	2,230	3,295	12,626	5,629	5,145	6,923	7,674	3,639	4,784	9,361
ハワイ						9,125	13,045	6,590	6,692	9,051	20,865

加藤十四郎『在米同胞発展史』博文館 明治41年10～11頁, K. K. KAWAKAMI "The Real Japanese Question" MacMillan Company 1921, p. 63. 在米日本人会編『在米日本人史』昭和15年70～71頁による。ハワイ渡航者は、アメリカ本土への転航のスラップとして渡航する者が多かった。たとえば、明治38年1月～11月の16,174人のハワイ渡航者数に対し(上表の数字とは相違するが)、アメリカ本土への転航者は11,615人にのぼったという(「明治39年12月13日在ホノルル斉藤総領事ヨリ林外務大臣宛布哇ニ於ケル本邦移民来住明細書進達ノ件」『日本外交文書』第39巻第二冊 自明治39年1月1日至明治39年12月31日 308頁)。

3 在米日本人数

年次	明治32	37	38	39	40	41
	35,000	53,764	61,539	73,539	89,573	103,683

永井松三編『日米文化交渉史』5移住 新装版 原書房 昭和56年 93頁による。

4 渡米関係旅券出願数と許可数(明治35年9月～明治36年9月)

府県名	和歌山	京都	大阪	神奈川	兵庫	新潟	岡山	山口	徳島	愛媛	高知	福岡	長崎	熊本
出願総件数	2,033	167	1,121	421	286	48	541	1,482	65	1,373	144	663	136	548
旅券下付件数	646	107	596	213	99	43	242	597	27	437	54	234	106	336
不認可件数	1,416	68	618	242	187	5	306	996	38	957	90	429	30	269

「明治37年4月28日清棲和歌山県知事ヨリ珍団外務次官宛 米国及加那陀行渡航取扱振り報告ノ件」付属書自明治35年9月至明治36年9月米加普通渡航〔商業學術等ノ目的有スル普通渡航者〕旅券下付出願総件数及旅券下付件数対照表『日本外交文書』第37巻第2冊 自明治37年1月1日至明治37年12月31日 275頁による。

*なお、以上の表で相互に矛盾する個処もあるがそのまましておく。もともと、いずれの数字も実数より少い概数を示しているからである。この表の目的は、渡米者のおおまかな数字をうかがうことにある。

堺利彦は、明治三四年の河上清の渡米に際して「うらやましい」とその日記に記し、石川啄木は、明治三七〇九年にかけて第二の野口米次郎たらんとして渡米熱にとりつかれた^④。三宅雪嶺はその著『大塊小塵』（明治三七年）で、「たとえ日本人排斥の声の高きを致すありとも其の移住すべき地は猶ほ茫として広し、更に幾倍の増殖を見るも決して狭きを覚えざらん、行いて彼地（米州西海岸—立川）に職業を求めんとする者は容易く之を求め得べく、普通に勉強して浪費せざる、則ち能く儲けて貯蓄するを得べし」と論じ、島崎藤村は、明治三七年に出筆し始めた『破戒』のなかで、主人公丑松をテキサス米作に向って渡米させた。社会問題の回避にすぎないと渡米熱に否定的だった幸徳秋水も、渡米直後の明治三八年二月には、「集会も言論も出版も自由で、金銭も儲け易い此地に於て、熱心に運動をしたならば、日本社会運動の策源地、兵站部及び迫害されたる同志の避難所を作り出して、恰も露国革命党員が瑞西を運動の根拠とした如くになりはしないかと思う^⑦」と明るい調子でのべていたのをみれば、少くとも渡米前にはアメリカ社会にひきつけられていたのかもしれない。また松崎源吉が、片山潜に「無暗に渡米を煽るようだが、これは一種の罪悪ではないか……一体社会主義が本業なのか、それとも渡米屋が本業なのか^⑧」とくっつかかったのは有名な話だが、この松崎も明治三六年には、「行け日本有為の青年男児、蝸牛角上の争闘に奔命して愚痴を並ぶるを止めよ、北米の天地は欣々として諸君を待てるにあらざや^⑨」と演説したり、渡米すれば「人間らしき幸福を享け得せしめ本当の文明開化の恩恵に浴することができ^⑩」とか「米国軍艦に乗って普通に勤務すれば千円貯めることは普通である^⑪」と論じていたように、片山と並ぶ渡米論者として社会運動史上に登場したのである。そして、安部磯雄・奥宮健之・大石誠之助・加藤時次郎も熱心な渡米論者だった^⑫。のちにアメリカで鍛えられた個性をみせる清沢冽・明石順三・翁久允が渡米していったのは、渡米熱がピークに達した明治四〇年代初めのことだった。

しかし、渡米熱の高まっていたこの時期、渡米はかなり困難だった。それは、渡米費用が高かったからというより、政府の厳しい制限策によるものだった。明治三五年呼寄せ渡航が認められ^⑬、明治三六年・三八年には主に学術目的のもの

渡航条件が一部緩和されたとはいえ、原則上は、明治三三年以降出稼ぎ目的の渡米（いわゆる移民）が禁止されていたからである。^⑮ 政府にとって渡米者は、とりわけ日露戦争後は、国の体面をそこない、日本人排斥運動・黄禍論をひきおこし、アメリカとの協調外交に波動をひきおこす元凶として、恥さらしの厄介者取締りの対象以外の何者でもなかったのである。旅券下付条件は、学術目的でも原則として中学卒業以上で一万円以上の資産のある者と厳しく、その調査は犯罪人扱いだった。^⑯ したがって、あやしげな密航業者が暗躍することにもなったのである。^⑰

それでは、なぜ厳しい渡航制限をぐぐりぬけてまでして、人々は渡米していったのか。これには定説めいたものがある。一刻も早く金を儲けて錦衣故郷すること、つまり、日本社会とりわけ農村の貧しさという送出力が最大の要因だ、というのがそれである。^⑱ 渡（在）米者自らが語った回想類だけでなく、当時の渡米論の多くが手取り早く稼げる出稼ぎの地といった文脈のなかでアメリカのイメージを語ったことが、そのことを裏付けているかのようにみえる。だが話はそう簡単ではない。渡米論を読めばすぐわかるように、稼げるだけでなく学べて洋行帰りにもなれる、というイメージが強烈に打ちだされているのである。しかも打ちだされただけでなく、このイメージこそが多くの人々の関心をひきつけていたものだった。このイメージが、渡米すること自体を立志や成功と同義のことにみなす雰囲気醸しだし、渡米奨励本や渡米奨励・情報雑誌が歓迎されるといった形での、渡米熱という社会現象をひきおこす要因になっていたのである。したがって、問題は、なぜこのようなイメージが人々の関心をひきつけたのか、いいかえるならば、日本の社会情況と密接に結びついたものとして渡米熱があったのではないか、ということである。わたしが、ここで念頭においているのは、渡米熱が、苦学熱や成功ブームとともにあったことである。

なお移民という言葉について簡単にふれておきたい。ここまでも通常使われている意味での移民を渡米者と書いてきたが、それは、渡米者のなから結果的に定住者が生みだされはしたが、当初の渡米の目的は、出稼ぎや自活しての大学卒業にあるものがほとんどで、渡米者の総称として移民という言葉は不適切だからである。元來移民は出稼ぎを意味してい

たが、現在では異った響きをもってしまっていることから、渡米者と呼ぶ方が適切だと思ふ。

① 『渡米雑誌』（のちに『亜米利加』）がどちらかといえば客観的に渡米関連情報を提供したのに対し、『渡米新報』は、力行会の苦学生救済・アジアの貧困からの脱却、といった使命感を強くうちだしていた。とはいえ、力行会は、事務的に渡米斡旋をおこなっていた。渡米協会・力行会については、別稿を用意している。

ここで、代表的な渡米奨励・情報雑誌の変遷をあげておく。

- 渡米協会関係
 - 「渡米案内」を『労働世界』第6年第1号（明治35年4月3日）に設ける（第7年第7号から『社会主義』→『社会主義』第8年第5号（明治37年3月3日）から渡米協会機関誌→『渡米雑誌』第9年第1号（明治38年1月）→『亜米利加』第11年1号（明治40年1月）→『亜米利加』第12年第3号（明治41年3月）から『日米通信』（準日刊ただし同年8月まで）の臨時増刊号の形をとる→第13年第5号（明治42年5月）まで
 - 「渡米協会記事」『社会新聞』第1号（明治40年6月2日）→『渡米』第1巻第1号（明治40年11月）片山潜主筆→『日米経済新報』明治41年4月（7月～9月休刊）→『社会新聞』内の「渡米案内」第48号（明治41年10月10日）→第72号（明治43年10月15日）まで
- 力行会
 - 『力行』（明治36年2月発刊）を「苦学者及渡米者の友」と銘うつ（遅くとも明治38年から）→『渡米新報』第1巻第1号（明治40年5月）→『渡米新報』明治41年1月から『力行』を吸収、第6巻第1号→第7巻第3号（明治42年3月）まで

② 「大阪毎日新聞」は、明治三五年以降、佐藤政治郎「米國土産」（明治三五年四月八日～二十九日、五月六日）、相島勘次郎「ハイカラ倶楽部」（明治三五年四月二十六日～二十八日）、矢野原由次郎「カリフォルニア

州農業一斑」（明治三五年九月一日、四日～五日）、榎府隠士「在米成功の日本人」（明治三六年一月一日～六月六日）、吉村大次郎「テキサス州日本人の米作」（明治三八年一月二七日～二月二四日）等、ひんぱんに渡米関連記事を掲載、質問が殺到するなどその反響は大きかった。同新聞を読んで、渡米を決意したとの証言もある（伊藤一男「北米百年桜」日出版社、昭和四八年四二頁）。『成功』は、殖民論の対象地としては、満韓清樺太を強調していたが、読者の質問が数多く寄せられたこともあって、明治三六年に入ってから、渡米関連記事を継続して掲載するようになった（その一部を本論でふれる）。その他、新聞では、『時事新報』が、明治三五年テキサス米作論を熱心に鼓吹、「河上清『米國書生氣質』や北沢寅之助・成沢金兵衛『新撰渡米案内』の一部は、『万朝報』にそれぞれ掲載されたものだった。『大阪朝日新聞』も、青尊生「再びテキサス州の米作について」（明治三六年一月二六日～二月三日）などを連載していた。そして、雑誌では、『中学世界』が、飯島榮太郎「東西修学上の比較」（第四巻第五号～六号、明治三四年四月一〇日～五月一〇日、同「米國の学風」（第四巻一三三号～一四号明治三四年一〇月一〇日～十一月一〇日）、『太陽』が、久保他治衛「在米同胞の鉄道労働に於ける実況」（第八巻第二号、明治三五年二月五日）、斎藤修一郎「北米太平洋沿岸と日本人」（第八巻第五号、明治三五年五月五日）、『実業世界』も、池田昇三「日本人の好移住地（テキサス米作）」（第二巻第六号、明治三七年三月一五日）等を掲載、落機山人（島貫兵大夫）「渡米最好時機」（第三巻第二号、明治三七年七月一五日）、同「在米日本人労働の実況」（第三巻第四号、明治三七年八月一五日）の掲載を機に質問が殺到、第三巻第七号（明治三七年一〇月一日）から、島貫による「米國渡航問答」欄を設けた。その他、

- 『六合雜誌』が、野上啓之助『殖民論』（第二七四号）明治三十六年一月一五日）、社論「政府は何故に海外渡航を防止せんとするか」（第二七七号）明治三十七年一月一五日）、『東洋経済新報』が、片山潜「北米移住論」（第二七六号）明治三十六年八月五日）、同「テキサス米作と日本人（一）」（第三〇五号）三〇八号）明治三十七年五月二五日）六月二五日）、『実業之日本』が、第八卷第一号）明治三十八年一月一巳）から「海外渡航案内欄」を設け、断続的に渡米関連記事を掲載、などである。
- ③ 「三十歳記」明治三十四年七月二二日『堺利彦全集』第一卷 法律文化社 昭和四十六年 所収 三七四頁。
- ④ 木股知史「立志と詩のアメリカ」『石川啄木一九〇九年』富岡書房 昭和五九年 二四九～二五七頁。
- ⑤ 三宅雪嶺『大塊一塵』政教社 明治三十七年『三宅雪嶺集』近代日本思想大系5 筑摩書房 昭和五〇年 所収 一〇四頁。
- ⑥ 幸徳秋水「在米同胞は幸福なりや」『日米』明治三十九年二月一五日『幸徳秋水全集』第六卷 明治文獻 昭和四三年 所収 五七～六一頁、同「渡米せしむべき人」『西米利加』第一年第一号 明治四〇年一月一四日。
- ⑦ 幸徳秋水「桑港より（一）」『光』第一卷第五号 明治三十九年一月二〇日。
- ⑧ 吉川守圀『荆逆星霜史』『資料日本社会運動史』6 青木書店 昭和四三年 所収 四四六頁。
- ⑨ 松崎源吉「北米に於ける予が経歴」『社会主義』第七年第一五号 明治三十六年七月五日。
- ⑩ 松崎源吉「吾人は何故に渡米を奨励する乎」『社会主義』第七年第一七号 明治三十六年八月三日。
- ⑪ 松崎源吉「米國軍艦における日本人（一）」『社会主義』第七年第二〇号 明治三十六年九月一八日。
- ⑫ 安部磯雄・奥宮健之は、それぞれ『北米之新日本』、『北米移民論』

- という奨励本をだし、渡米協会の「渡米奨励演説会」（明治三十六年二月一五日・明治三十七年六月一六日）の弁士ともなった（安部磯雄「青年の爲めに海外渡航の途を開くべし」『社会主義』第八年第四号）明治三十七年二月一八日、奥宮健之「太平洋上に於ける日本帝國の地位」『社会主義』第八年第一〇号）明治三十七年八月三日）。加藤時次郎も、上記の演説会の弁士となった（加藤時次郎「國民の發展」『社会主義』第八年第九号）明治三十七年七月三日）。大石誠之助は、渡米協会和歌山支部を設立している（『渡米雜誌』第九年第四号）明治三十八年四月）。
- ⑬ 「明治三十五年六月九日小林外務大臣ヨリ警視總監外道府県宛 渡米移民渡航許可ニ関スル件」『日本外交文書』第三五卷 自明治三十五年一月一日起至明治三十五年二月三十一日 六九九頁。
- ⑭ 「明治三十八年一月一四日珍田外務次官ヨリ北海道庁長官各府県知事宛 學術修業ヲ目的トスル米國渡航者ニ関スル件」『日本外交文書』第三八卷第二册 自明治三十八年一月一日起至明治三十八年二月三十一日 三〇四～三五頁。
- ⑮ 「明治三三年八月二日青木外務大臣ヨリ警視庁及各地方庁宛 北米合衆國及加那陀移民渡航全禁止方訓令之件」『日本外交文書』第三三卷 自明治三三年一月一日起至明治三三年二月三十一日 三九六頁。
- ⑯ たとえば、『労働世界』第六年第五号 明治三十五年五月一三日。
- ⑰ たとえば、渡辺勘次郎『海外出稼案内』内外出版 明治三十五年 四八～五六頁、『大阪朝日新聞』明治三十五年二月二四日、「明治三十七年八月二日周布神奈川県知事ヲリ珍田外務次官宛 旅券下附取扱ニ関シ回報ノ件」『日本外交文書』明治三十七年第二分册 自明治三十七年一月一日起至明治三十七年二月三十一日、『渡米雜誌』第九年第四号）明治三十八年四月。
- ⑱ たとえば、若槻泰雄『排日の歴史』中公新書 昭和四十七年 三五～四三頁、鶴谷寿『アメリカ西部開拓と日本人』日本放送出版協会 昭

和五二年 三九〇四五頁 一一六—一一八頁。

⑩ たとえば、前掲伊藤一男『北米百年校』所収の教々の回想。

2 苦学生の天国論—渡米・立志・奮闘・成功

明治三〇年代半ば頃には、働いて学資をえて学歴（問）をつけて立身を志そうとする、いわゆる苦学生の存在が社会的に注目をあびるようになっていた。①『青年学生独立自活法』（大内徳亮 明治三四年）・『独学自修策』（久津見蔵村 明治三五年）・『学生自活法』（緒方流水 明治三六年）・『自活苦学生』（苦学子 明治三六年）といった苦学生向けの本が数多く出版され、苦学社や力行会のような苦学生の物心両面にわたる援助を看板とする団体がかなりの苦学生をあつめ、両団体には黒岩涙香、内村鑑三、石川安次郎、木下尚江、片山潜、堺利彦、安部磯雄、押川方義、島田三郎、松村介石らも賛助していたのである。②青年に爆発的人気を呼んだ『成功』（明治三五年一〇月発刊）も「苦学者の同情者を以て任じて」いた。③明治三〇年代には、学歴と社会的地位が結びつくいわゆる学歴社会の成立が青年に実感される一方で、中学校以上の上級学校の重い経済的負担から庶民の子弟の進学は困難なものだった。④この情況のなかで、学歴こそが立身出世の参加資格だ、とする青年の動向が、苦学熱という形で社会に表われていたといえそうである。

明治三〇年代の渡米論が多くの読者をえたのは、まず第一に、このような苦学生を対象としたからだったのである。明治三四年八月発売後、一週間で二千部売れるといったベストセラーとなった、片山潜の『渡米案内』は、自らのアメリカでの苦学体験を語り、苦学生の渡米を奨励したものだ。⑤片山が明治三五年設立した渡米協会が、商売としてなりたつほど活況を呈したのは、苦学と渡米を結びつけたからだった。⑥また、苦学生援助を唱って出発した力行会も、「日本の苦学生を苦学せしむるには米国に行かせるに限ること」、「渡米の優待法あり」といったように、苦学と渡米を結びつけることで、明治三六年頃から急速に会が拡大、明治四〇年には、渡米者の寄付を基に総額一万二千円の力行教会を建設するほどになった。⑦そして、苦学社も渡米への関心を示していた。

渡米協会・力行会に代表される、苦学生向けの渡米論が強調したのは、つぎのように、アメリカ社会は逆境の青年が自立活で機会をつかむシステムとなっており、しかも金がたやすく稼げるから、日本よりはるかに苦学に適しかつ容易だということだった。

「北米は苦学生の天国なり。苦学生は学者資本家及政治家の同情を売^テる者なり。」

「独り鉄道の工事のみならず諸般の農事より冬期の伐木に至るまで各種の仕事は致る所に日本人の手を要するが故に致る所に日本人を歓迎するなり、されば労働を専らとすること能わざる学生にすらそれ相應に軽便の労働ありて傍ら即ち苦学する事は至て容易なる事を以て日本に於て苦学せんの決心あるものは奮発一番彼の地に渡りてスクールボーイなり其他適當の仕事を得て勉学せんことを勧むるものなり」

「米国は境土の広大天与の豊穰、事業の繁多、労働の神聖及び独立心の旺盛なる等の諸原因より、薄資にして篤学の士には最も幸福なる国柄にして学資調達の方法は其幾多あるを知らず」

「米国の社会が這般気鋭有為の青年の活気を鼓舞振興せしむると云う同情心は大なるもので、而して此大なる同情が発して此等の青年をして成功の彼岸に達せしむ可き諸機関となつて居ることは、実に完備したものと云うて宜しかろう。米国は志気一決百折不撓各其目的に向つて直行する人を歓迎する。我國の青年にして志の堅きありて而も学資の支途に苦しむる人は、乞う一度び米国に遊んで其志す所を為せ、米の天地は飲んで諸君を歓迎せむ」

若き日の松岡洋石も、在米体験からくるにがしさをおぼえながらも、渡米熱にうながされて、明治三七年には『成功』で、アメリカは苦学生の天国といった、これらと同様の渡米論を連続的に論じていた。つぎにあげるのは、渡米協会や『成功』によせられた質問だが、これらをも、多かれ少かれ在米体験をもつものの情報提供を求める声、松岡をもまきこむほど、大きかったことがうかがえるだろう。

「（渡米後—立川）修学を為す目的にして直ちに就職ありや」^⑬

「（渡米後—立川）高等学校に学資を要せずして修学すること及貯金後東部の大学に修学する道如何」^⑭

「早稲田校外生無資にして渡米し大学に入らんとす、卒業生は何を要するや」^⑮

「余は無学資にして渡米し彼地の大学を卒業せんとす、これ能うべきや否や」^⑯

「小生は米国に行きスクールボーイとなり彼国の事情を観察し傍勉学せんとす、能う可きや」^⑰

「生は二二才なるが高商の入学試験に失敗せり、再度同試験に応ずると渡米して苦学すると何れか可なるや」^⑱

このようにみえてくると、苦学生の日天論と苦学生の日求めた情報が見事に適合していたことは一目瞭然、いかえれば、渡米論者たちが求められていた情報のカンどころをうまくおさえて、渡米論を展開していたといえそうである。たとえば、片山潜が、「今や高等学校の門は閉じられ、加うるに学資は乏しく自活学業を修むるの道なく、去りとして実業に従事するの資格なく、何ら考察しても日本で立身の道開けず、故に有為の青年は海外に渡航して其一身を立てんと企つる者其数を知らず」^⑲と語っていたように。松村介石も、成功（修養）訓として典型的なその著『其生涯の礎』（成功雜誌社 明治四一年）のなかで、つぎのように語っているが、苦学熱と渡米熱の関わりについて、うまくいあてているように思う。

「今日では、一般的にいえば、青年が自己の運命を發展せしめ得べきや否やは、一つには修学の問題に關係し、終には金の問題に帰着する。……而して其志望を貫徹するや否やは、主として学資の一点に帰するのであるから、不幸にして貧家に生まれ、俸材を有し猛志を抱きて、不遇憾みを飲んで日を送る者も甚だ多いであろう。是に於てか多くの渡米志望者を出だし、苦学生を出す有様と為つて居る」^⑳

そして、苦学生向けの渡米論が魅力だったのは、苦学が容易だということだけでなく、アメリカにいれば立身の武器となる英語を身につけられるというようなことも含めて、洋行帰りになれる、というイメージを喚起したからだった。すでに明治三〇年代、アメリカの大学帰りの肩書は、アメドクと蔑視され、大学の程度も低いとの風評もひろがり、学歴とし

てはあまり有効ではなくなっていたが（したがって、始めからアメリカをステップとしてヨーロッパにいかうとする者もいた）、どんな洋行帰りでも立身出世と直接結びついた明治初期の残像が尾をひいていたといえよう。渡米論のなかでの洋行帰りのイメージは、直接的には、つぎのように、在米体験が日本の進歩（近代化）に役立つ人材を作るという姿で論じられていた。

「人若し米国に到り其の文明實際の有様を視察し其の空気を呼吸して帰らば、一仙の銭を得る所なく一個の学芸技術を修むることなくして徒手にて帰るも己に大に得る所ありと信ず、即ち文明の社会的教育を受け我国進歩の度を理解し現今の日本に満足することなく之が改良進歩を熱心に希望するに到るべし、其の精神上の所得豈に大ならずとせんや、此の心即ち我が国を進むるの基である」^②

「寄語す、少壮の士、公等若し新興国の新人民として、其の對手者たる泰西国民の真相を知り、自から文明の人となり文明の業を行なわんと欲せば、須く去て文明の国に遊べ、特に最新文明の米国に遊べ」^③

「この国（アメリカ―立川）に起臥するものは常に文明の空気を吸うてその新事物に接し、その新智識を養うことを得、これ実に更に大なる無形の報酬というべし」^④

稼げて学べて洋行帰り、このイメージが苦学と渡米を結びつけた、いいかえれば、このイメージが、何としてでも立身出世の鍵となる学歴を身につけたいといった苦学生のも、いつてみれば、焦燥感に答えたものだったので、苦学生をひきつけることができたのである。この稼げて学べて洋行帰りのイメージは、あとでふれるように、移民論・殖民論としてもまた、渡米論を魅力的にする大きな要素ともなる。

このようにみてるならば、苦学生向けの渡米論がすくいとっていたのは、あるいはすくいとろうとしていたのは、学歴社会に象徴されるような日本社会への満たされぬ思いや息苦しきだったといってもよいだろう。なぜなら、先に引用した部分からもうかがえるように、苦学生向けの渡米論は、アメリカ社会を学閥・門閥に左右されない独立自活・労働の神

聖の実力次第の機会と成功のシステム、力行会の唱い文句でいえば「米國こそは逆境者最良の憤闘地」、といったイメージで描きだすなかで語られ、また苦学希望の渡米者も、開放的な社会で、学歴とともに自由と機会を求めて渡米していったものが多かったからである。このことは、『成功』に掲載された、つぎのような、渡米熱をいさめた文章と読者の質問によく象徴されていると思う。

「単に米國に渡らば、直に運命の開くる如き、空想を懐き渡るは甚だ当を得ざるものなり、宜しく熟考あれ」^⑤

「生は本年一八才商業奉公の身ですが渡米労働傍ら勉学もしくは貯蓄して其の財を資本として実業に従事し度き考えですが、渡米の方法及び渡米後就職する最利益の業等御教へ下さい」^⑥

また、中学卒業後専修学校に入学のかたわら斉藤英学校で勉強、一九〇三年二才で渡米、一九四五年シアトル日本人会理事となった原誠一は、片山潜の渡米論を聞いて「向学心に燃え、かつまた、日本のようなせまい国であくせく働くより、思い切って、広いアメリカへ行った方が賢明であろうと考えた」のが渡米の動機だったと語っている。そして、児玉星人の渡米に際して、「あゝゴールデンゲートの月今如何ん、共に舟を桑港外に棹するの日夫れ何れぞや」と書き、その直後の明治三七年三月渡米した早稲田社会学会創立メンバーの中沢二郎や、その他岩佐作太郎・赤羽一・金子喜一といった社会批判精神の旺盛なものたちの渡米も、原のような動機と地続きだったろう。さらに、当時かなり多かった徴兵忌避目的の渡米者も、ここにくわえられるであろう。たとえば、中学を四年で中退、一九〇三年渡米、邦字雑誌・新聞記者として活躍、タコマ在米日本人会の中核ともなった大塚漁夫は、渡米の動機を「徴兵忌避が第一の目的であり、第二が遊学であり、第三が学問なり事業なりの僥倖的成功であった」と回想している。^⑦

片山潜・島貫兵大夫・吉村次郎・山根悟一ら、いってみれば、渡米論者のチャンピオンたちは、いままでみたような、苦学生の天国・機会と成功の社会といったアメリカのイメージを、社会の改良進歩、アジア的貧困からの脱却といった自らの思想性からくる使命感をもって本気でふりまいた。また、渡米者の方も、厳しい渡航制限をくぐりぬけて、気軽に明

るく渡米し、渡米後も、そこにこめられた心情はさまざまであれ、渡米論者のアメリカのイメージをなぞったものを書き送ってきたものが多かった^①。いままでみたようなアメリカのイメージは、すでに明治一〇年代後半から明治二〇年代にかけて、かなりの渡米者をだすほど青年の心をとらえていたが、明治三〇年代半ば、学歴社会に息苦しさが青年に実感されるといった、日本の社会の側にそのイメージをうけいれる状況が醸成されたことで、一気にその量を増して、噴出したのである。

ここで考えておきたいのは、いままでみたようなアメリカのイメージをふりまいた渡米論者のほとんどが、在米体験の持ち主だったこと、つまり、渡米論者の在米体験とアメリカのイメージとを、そのまま一元的に結びつけられないことである。ジャップ・スケパーといった言葉にさらされる身一つの渡米者の在米体験は、必ずや、いままでみたようなアメリカのイメージを、打ち消す方向に働くものとしてあったはずであり、それを密封したり棚上げにしたまま語ったのが、アメリカのイメージ・渡米論だったからである。なぜ、そうなったのか、いや、そうしたのか。わたしの考えでは、それは、アメリカをモデルとした日本製のアメリカ、あくまでもどこまでいっても、日本製のアメリカを語ったからである。いいかえれば、日本の社会への満たされぬ思いや息苦しさを倒錯させたイメージを語ったからである。したがって、自らの在米体験、「現実のアメリカ」を、密封したり棚上げしたものになったわけである。これには、大きな問題が孕まれていたのである。

日露戦争後、渡米論者の間では、渡米論としての苦学生天国論は後景にしりぞいていき、出稼ぎ（つまりは金）や農業殖民を目的に渡米しろ、といった渡米論が強く打ち出されるようになる。

① Earl H. Kimmonth, "The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought From Semurai to Salary Man" University of California Press 1981, pp. 178-187.

② 苦学社は、「貧少年に苦学の志を起さしめ其の道にある者の心靈と

肉体の上に幸福を計るを以て目的となす」と唱って、明治三十三年一月設立され、黒岩涙香・内村鑑三・石川安次郎・木下尚江・片山潜・堺利彦・安部磯雄らの協力をえながら、苦学奨励演説会（月一回）の開催や、機関誌『苦学界』を発行していた（『苦学界』第一四号 明治三

五年五月一日、『毎日新聞』明治三十四年七月一日、九月三日、
 一〇月一日、Earl H. Kinnonth, "The Self-Made Man in Meiji
 Japanese Thought-From Samurai to Savtry Man" pp. 180-181. 力
 行会は、押川方義門下の島貫兵太夫によって、明治三三年九月頃（そ
 の前身は明治三〇年一月）設立され、天下有為の貧学生の品性知性の
 教育及び其方法」を唱い、明治三五年二回にわたって押川方義、島田
 三郎、松村介石らを発起人とする慈善音楽会を開いた頃から注目をあ
 び始め、明治三六年二月からは機関誌『力行』を発行した（島貫兵太
 夫『力行会とは何ぞや』警醒社 明治四四年 七五頁、『労働世界』第
 六五号 明治三三年九月一日、『六合雜誌』第二二二二号 明治三五年
 一〇月一日、『力行』創刊号 明治三六年二月）。

③ 『成功』の綱目

④ 深谷昌志『学歴主義の系譜』黎明書房 昭和四四年「第四章 公教
 育の整備と段階別学歴主義の形成」『第五章 中・高等教育の拡大と
 格差の増大』Earl H. Kinnonth, "The Self-Made Man in Meiji
 Japanese Thought-From Samurai to Salary Man" pp. 187, 194-5.
 参照。

⑤ 片山のもとには、『渡米案内』刊行前から苦学生の渡米希望者が数多
 く集まり、数十人程度が渡米していった（片山潜『渡米案内』労働新聞
 社 明治三四年 七〜八頁、『労働世界』第八〇号 明治三四年六月一日
 英文欄）。戸張孤雁もその一人だったが（宮川寅雄片山潜と戸張孤雁
 『歴史評論』一〇二号 昭和三四年二月）、渡米協会設立の明治三五年
 以降の『労働世界』（のちに『社会主義』の『渡米案内欄』に、毎号の
 ように掲載された渡米者の書簡も、それを単的にうかがわしてくれ
 る。
 ⑥ 前掲島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』六六〜一〇四頁、『財団法人日
 本力行会創立五十年史』昭和二年 二〇〜五五頁、『力行』創刊号
 明治三六年二月、稲垣真美『兵役を拒否した日本人―灯台社の戦時下

抵抗』岩波新書 昭和四七年 一〜二頁、前掲伊藤一男『北米百年按』
 二七頁 六三〜五頁。力行会は、明治三七年八月までに二六〇名余
 （『最近渡米策』）、明治三八年六月までに三八〇名余（『実地渡米』）、
 明治四一年二月までに二二五名（『渡米新報』第六年第三号 明治四
 一年三月一日）を渡米させたと公称した。
 ⑦ 苦学生は、『米國苦学界近況』なる本の刊行を予告していた（『苦学
 界』第一七号 明治三五年七月五日）。

⑧ 片山潜『続渡米案内』渡米協会 明治三五年 六六頁。
 ⑨ 島貫兵太夫『最近正確渡米案内大全』中府堂 明治三四年 六七
 八頁。

⑩ 飯島栄太郎『米國渡航案内』博文館 明治三五年 一三頁。
 ⑪ 独学生「米國苦学実験談」『成功』第二卷第六号 明治三六年九月一
 〇日。

⑫ 松岡洋右「米國西部大学学風」『成功』第四卷第二号 明治三七年四
 月一日、同「米國に於ける日本の苦学生」『成功』第四卷第五号 明治
 三七年五月一日。その他「在米國日本労働者の職業」『成功』第四
 卷三号 明治三七年四月一日、「米國に於ける本邦移民の生活」『成
 功』第四卷第四号 明治三七年五月一日。

⑬ 『社会主義』第八年第二号 明治三七年一月一日。
 ⑭ 『社会主義』第八年第八号 明治三七年六月三日。
 ⑮ 『社会主義』第八年第一二号 明治三七年一〇月三日。
 ⑯ 『成功』第三卷第二号 明治三六年二月一日。
 ⑰ 『成功』第五卷第四号 明治三七年一〇月一日。
 ⑱ 『成功』第七卷第二号 明治三八年八月一日。
 ⑲ 前掲片山潜『続渡米案内』五頁。
 ⑳ 松村介石『真生涯の礎』成功雜誌社 明治四一年 九〇頁。
 ㉑ たとえば、前掲三宅雪嶺『大塊一塵』『三宅雪嶺集』近代日本思想大

系5 所収 一五七頁、松岡洋石「米圃に於ける日本の苦学生」『成功』第四巻第五号、明治三七年五月一日、中沢二郎「柔港より」『社会主義』第八年第一二号、明治三七年一〇月三日、川田鉄弥『欧米近時の大勢』大倉書店、明治四三年 九〇頁。

⑲ 前掲島貫兵太夫『最近正確渡米案内大全』一五頁。

⑳ 吉村大次郎『北米遊学案内』岡島書店、明治三六年 二三頁。

㉑ 一柳松庵(讓二)『増訂 渡米之彙』明治三七年 一二頁。

㉒ 『成功』第二巻第一号、明治三六年四月一〇日。

㉓ 『成功』第九巻第五号、明治三九年八月一日。ちなみにこれへの回答は、努力次第では成功するといったあとで、「此類の質問者甚だ多し、概して本誌にては同種の事件を煩記せざるを以て他の同質問者は

比記に由りて大体を領し他は自ら判すべし」というものだった。

⑳ 前掲伊藤一男『北米百年校』六七頁。

㉔ 『社会主義』第七年第二四号、明治三六年一月一日、同第八年第六号、明治三七年四月三日

⑳ Ichihashi Yamato (市橋安) "Japanese in the United States", Stanford University Press 1932, pp. 87-88. 渡米協会や『成功』に

も、徴兵猶子に関する質問が、かなりよせられていた。

㉕ 伊藤一男『統北百年校』日貿出版社、昭和四八年 五頁。

㉖ たとえば、『労働世界』(のちに『社会主義』)に、毎号のように掲載された渡米者の書簡。

㉗ 在米日本人会編『在米日本人史』昭和一五年 三三〇四頁。

3 アメリカの流行・カーネギー・ルーズベルト・マーテン

渡米論者が描きだした機会と成功の社会といったアメリカのイメージは、単に渡米論と結びついたものではなかった。先に簡単にふれたように、明治三〇年代半ばから日露戦争後にかけての、いわゆる成功ブームのなかで、大量にふりまかれたのである。質量ともに、成功ブームのなかに、渡米論のアメリカのイメージもあった、というほうが適切なくらいであった。

この成功ブームのいわば火つけ役となったのが、よく知られているように、明治三五年一〇月発行された『成功』(月刊が原則)だった。『成功』は、知識人からは処世術や拝金宗をあおりたてるものと批難されることが多かったが、新時代にふさわしい積極的・自助的人物の養成を唱い、青年の爆発的人気を呼び、オピニオンリーダーとなったといっても過言ではなかった^①。いかなる逆境にあっても、立志(学問・富・名声等)遂行に向って、刻苦精勵・奮闘すれば、必ずや立志は

成功すると明るく言い続けた。いいかえれば、修養と世俗的成功とを結びつけたのである。このような成功（修養）論の思想性が、アメリカに求められた部分が大きかったのである。つまり、竹内洋がいうように、もし「出世の機会は万人に開放されており、「勤儉努力」だけが、「成敗」の分岐を決定する」といった「出世主義的平等主義」が日本の立身出世思想の特徴の一つで、「道徳的に善なることは当然世俗的利益をもたらず」というのが日本の通俗道徳だったとするなら、そのなかに、アメリカのイメージを換骨奪胎したのである。これは、『成功』だけでなく、当時の成功（修養）論の多くにいえることだった。

カーネギー・ルーズベルトの名が、あらゆるといってもよいほどの新聞・雑誌に登場し、カーネギーの『実業之帝国』（小池靖一訳 実業之日本社、他の出版社からの数種ある）、ルーズベルトの『奮闘的生活』（成功雑誌社訳 成功雑誌社 明治三六年）、マーデンの一連の著作、たとえば『猛志と成功』（成功雑誌社訳 成功雑誌社 明治三六年）、といった翻訳ものがベストセラーとなった。『実業之帝国』は赤手空拳から一〇億円の富豪となり金をどう使うかを知った理想の実業家の著作として、^④『奮闘的生活』はアメリカの躍進を生みだした精神、自己実現・奮闘主義の真髓を実践している理想の政治家の著作として、それぞれ宣伝されたものだった。『奮闘的生活』は、和辻哲郎・石川啄木も関心をもって読んでいた。^⑥ マーデンものは、若き日の満川亀太郎を励ましたように、^⑦ 逆境にある青年の修養本として読まれた。^⑧ 明治三〇年代半ば以降の、カーネギー・ルーズベルト・マーデンのもてはやされ方は、社会主義者を始めとする多くのそれへの反発もふくめて、ブームと呼べるものだったのである。^⑨

その他、リンカーンやガフィールドが「丸太小屋から大統領」といった苦学の象徴として、^⑩ ロックフェラーやヴァンダービルトが「赤手空拳から大富豪」の自助的人物として、^⑪ そしてまた、アメリカの実業家は日本の実業家の模範だとも強調された。^⑫ アメリカ製の大統領や大富豪が、日本のヒーローとなった時代だったのである。この雰囲気なかで、機会と成功の社会アメリカというイメージが流行し、アメリカを一層身近なものにした。

こういった事態は、何を示唆しているだろうか。明治三〇年代、「体制秩序の確立とともに乱世型の立身出世の機会は閉ざされ」たとひろく実感されていたことや、社会正義を求める声が高まっていたことなどを考えにいれると、成功ブームとそこでのアメリカの流行は、渡米熱と同じく、社会への満たされぬ思いや息苦しさの倒錯した表現だったように、わたしには思える。そして、それとともに、成功ブームとそこでのアメリカの流行、渡米熱は、ある面において、明治期資本制が生みだしたかがわしさや明るさが、その背景となっていたようにも思える。わたしがいいたいのは、これらの動向の裏面、というより表面といった方が適切かもしれないが、少なくとも知識人の中にはひろがっていた、アメリカを拝金宗の文化的には見るべきものない軽佻浮薄の国だとするイメージのことである。この拝金宗の軽佻浮薄というイメージは、その後、西洋の功利主義の象徴のように考えられ、アメリカへの屈辱感・劣等感や反発と錯綜して、反米意識のいつてみれば理論的根拠となっていくが、ここでは、そのことではなく、拝金宗だからこそ、アメリカが流行した側面を考えてみたいのである。伊藤整が、知識人の間では「明治の中頃から後の社会においては何か事業を営むこと、そして成功することは悪を行なうことだと考えられてきた」というような意味で、日本では日陰にひそめられていた拝金宗を、アメリカの流行は、積極的な価値をもつものとして、日なたに登場させた側面があった。カーネギーブームは、その単的な表われと思われる。そして、拝金宗は、直接的には、アメリカの個人の自由や不覇独立の精神、ダイナミックな発展をもたらした企業的精神の基盤であると語ったものから、渡米論のなかで強調されたように、金銭は労働の報酬で権利は堂々と主張しろ、金銭は何ら賤しむべきものでない、といった労働の神聖論の形で語られた。そこで、これらの論者たちがいいたかったのは、わたしの考えでは、金がなくては生活ができない、金のためなら人のことなど構っていられない、といった生活思想や資本制のリアリズムを、知識人のように、社会の不正・墮落の根源とみなして、嘆いたり嘲笑したりして封じこめてしまうのではなく、その拝金宗こそがブルジョアデモクラシーの基盤であるということだったと考えられないわけではないのである。片山潜が、その例証であった。そして、島貫兵大夫の「肉と霊とを共に救うにあらずんば、人間の

救いは全からず、人間は幽霊にあらず」といった靈肉救済論や、^④ つぎのような渡米論は、そこまであつた。

「金を得る事に専心つとめる、何でも出来る事に手をつける、之が今の逆境者が順境に向う唯一の方法である。今の世紀はこれではなくてはならない。……余は迂遠なる文字を弄する事を止め、此所に直截に云わん、より多くの金を速やかに得る方法は渡米するより宜い方法はない、金を得るには渡米するのが最も捷徑である」と^②

明治資本制が生み出した拝余宗の浸透といった状況があつたこともまた、成功ブームとそこでのアメリカの流行、渡米熱の要因となつていたと考えたいと思う。

① 成功ブームに関しては、竹内洋「日露戦争前後の成功ブームとその変容」雑誌『成功』（一九〇一—一九一五年）にみる一『日本人の出世観』学文社 昭和五三年一〇六—一三三頁 が詳しい。

② 前掲竹内洋『日本人の出世観』四二頁。

③ 同右 一一〇頁。

④ 『実業之帝國』（実業之日本社版）の広告文（『成功』第一巻第四号 明治三六年一月一日 所収）

「赤手以て十億円の富を作り鋼鉄大王として雷名を世界に轟かせる米国の富豪カーネギー氏は自己の経験に徴して成功の秘訣致富の要道を説き且つ満天下の青年と富豪とに向て総代の警告を与えたるを本書と為す」

吉田佐吉・柴原亀二共訳『実業之帝國』文武堂 明治三五年の広告文

「成功」第一巻第五号 明治三六年一月一日

「カーネギーは当代の巨人なり赤手にして財界の霸王となり而して蓄財を散々尽して公共の爲に備うるを以て富者の責任なりと認め、自ら其財を悉く擲ちて大学図書館等に寄与して其主張を遂ぐるに及々乎たり」

⑤ 『奮闘的生活』の広告文（『成功』第三巻第三号 明治三八年九月一

日 所収）

「是れ現世丈夫中の丈夫、大統領ルーズベルト氏が其世界を遊観するの眼識を以て椽大の筆を揮ひし物、二十世紀の潮流に棹して、当代に処せんとする者は、正して如何なる人生觀を懷き、如何なる生活を營むべき乎に就き説くこと精細、無慮千数方言の大著述なり」

また、ルーズベルトの『亜米利加魂』（成功雜誌社訳 成功雜誌社 明治三八年）のつぎのような広告文（『成功』第七巻第三号 明三八年九月一日所収）も参照。

「書中の大要は現時世界の富国として国益々隆盛なる亜米利加合衆國は如何なる精神に基き、如何なる主義を奉じて斯の如きの大勃興を来すに至りし乎、又將來は如何なる方針に因り益々国運の發展を計らざるべからざる乎、膨脹の國民富強の國民に必要な要素如何、今後の青年者は正に如何なる精神を有し、如何にして世に処すべき乎、等に就き、熱烈、火の如き現大統領一流の筆鋒を以て叙述しあり、誠に現代に於る我國民の一説すべき好著なり」

⑥ 和辻哲郎「科学的価値に対する疑問」『民族学研究』特集ルース・ベネディクト『菊と刀』第一四巻第四号 昭和二年、「石川啄木 伊東圭一郎宛明治三七年八月三日付書簡」『啄木全集』第七卷 筑摩書房

昭和四三年 六七頁。

⑦ 満川亀太郎『三国干渉以後』平凡社 昭和二〇年 復刻版 伝統と現代社 昭和五二年五四～五頁。

⑧ 『猛志と成功』の広告文(『成功』第三卷第三号 明治三六年一月二日 所収)

「本書は欧米自助的青年崇拜の中心たる、マーデン氏が著せる、成功に關する六小品中の一なり、複雑極る今日の社会には、如何なる猛心を以て事に當るべき乎、如何にして人生の激闘に勝つべき乎、之に應ずべき精神修養法を説く、最も精細、誠に現世紀に呼吸する者の一日も欠くべからざる良書と言ふべき也」

⑨ 日本におけるカーネギーとマーデンの受容については、Earl H. Kinnmonth, "The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought From Samurai to Salary Man", pp. 158-160, pp. 262-271. が詳しい。三宅雪嶺は、その著『明治思想小史』(大正二年)のなかで、ルーズベルトとマーデンの人氣にふれ、ルーズベルトは「近來の豪傑として人の耳目に映ずるだけ何等談論の言ふべきものないにしても人の意を強くする所があるが、其の上層階級生活を説き、自ら東奔西走して之を事業に示して居る、新聞上の電報のみで可なり人をかぶせざした。新興國の北米を代表するものであって、競争の激烈なる今の世界では何人も斯くあらねばなるまい」とて、其の突飛なる運動に賛成せぬにしても何処となく面白味を感じて居る」と書き、マーデンは「青年にルーズベルトたることを教えたような所がある」とのべている(『三宅雪嶺集』近代日本思想大系5 筑摩書房 昭和五〇年 所収 二三二頁)。ルーズベルトは、日露戦争前後、「実に渠は、至誠の人である。……渠は又実に、ワシントンンの純潔と、リンコルンの温雅とを併せ保て居るもので……」(小塚空谷「西半球世界の偉傑ルウスベルト」『成功』第一卷第四号 明治三六年一月一日)、といったイメージで語られ

ていた。

⑩ たとえば、「米國大統領リンコルンの生家に題す」『成功』第一卷第一号 明三五年一〇月一〇日、高田大観「大統領雅比爾士の生涯一個の田舎漢奮勵人間の最高位に登る」『成功』第二卷第四号 明治三六年七月一〇日。

⑪ たとえば、「二億五千万円の大富家(バンダービルトの一生)」『成功』第一卷第一号 明治三五年一〇月一〇日、安孫子貞次郎「世界石油王ロックフェラー青年時代」『成功』第一卷第三号 明治三五年一月一〇日。

⑫ 他ならぬカーネギー・ロックフェラー・ヴァンダービルトが、そのようなものとして強調されていたのはいうまでもない。その他、高田大観「米國鐵道王とル成功譚 一小波止揚人夫志を立て、鐵道王と為る」『成功』第五卷第一号 明治三七年七月一日。

⑬ 見田宗介「立身出世主義」の構造「現代日本の心情と論理」筑摩書房 昭和四六年 一九一頁。

⑭ 飛鳥井雅道「初期社会主義」『岩波講座日本歴史17』近代4 昭和五一年。

⑮ 周知の内村鑑三が排撃したマモニズムのアメリカ、ということである。その他、たとえば、幸徳秋水のつぎのようなアメリカ像である(『排斥論』『日米』明治三九年四月一五日『幸徳秋水全集』第六卷 明治文獻 昭和四三年 所収 七九頁)。

「吾人は米國の富の益々大なるを知る。……而し是れ唯だ國大に、地広く、自然の富源の豊なるを以ての故のみ、物質的發達の上に於てのみ、若夫れ精神的思想的に、偉大なる人物事業を生ぜんには、米國は余りに躁進也、輕浮也、流行を趁うを過ぐるを見る也」

⑯ 伊藤整『近代日本人の發想の諸形式』岩波文庫版 昭和五六年 六一頁。

- ⑰ たとえば大原祥一「米国の学風」『渡米雜誌』第九卷第四号 明治三八年四月、梅田又次郎「米国の家庭」『活動之日本』第四卷第一号 明治三九年一〇月一五日、秋山一生「現代亞米利加魂」『亞米利加』第一一年第一号 明治四〇年一月一日、記者「ヤンキーの本領」『亞米利加』第二二年第三号 明治四二年三月一日、矢部八重吉「米国の家庭」『亞米利加』第二二年第六号 明治四一年六月一日。
- ⑱ たとえば、前掲片山潜『渡米案内』三四頁、前掲渡辺四郎『海外立身の手引』五四頁、清水鶴三郎『米國労働便覧』明治三五年二六二―三頁。
- ⑲ たとえば、白柳秀潮「現代の青年」(一)『社会主義』第八年第一号 明治三七年一月三日、堺利彦「大金もうけの秘訣」『平民新聞』第四九号 明治三七年一〇月一六日。
- ⑳ 立川健治「片山潜」『史林』六六卷二号 昭和五八年三月。
- ㉑ 「静思活動」『渡米新報』第七卷第二号 明治四二年二月一五日。
- ㉒ 島貫兵大夫『新苦学法』警醒社書店 明治四四年 二二頁。

4 移民論・殖民論としての渡米論—金のなる木のある国・新日本の建設

明治三〇年代の渡米論は、アメリカを人口問題を始めとする社会的・経済的問題を解決する最適の地と描きだすことができた。つまり、渡米論は移民論・殖民論としてもあった^①。しかも、当時は、その他中南米・満州・朝鮮・樺太・南洋といった地域を対象としたものなかにあって、最も現実感がありかつ群を抜いた人気をえていたのである。この現実感と人気を支えていたのは何か。

それは、手取り早く稼げる出稼ぎの地、出稼ぎはアメリカに限る、金のなる木のある国、といったイメージだった。このようなイメージは、明治二〇年代にもそれなりにひろまっていたが、一気にその度を増したのは、明治三〇年代に入ってきた^②。渡米論は、金儲けのハウツーものに共通するように、金儲けには刻苦精励・忍耐・奮闘・努力が必要と書きこんでいたが、イメージ的には、「賃金は日本の十倍」といったものである。

「労働営利を目的として来る人に対しては、合衆国は世界第一の宝庫なることを紹介すべし。……赤手空拳奨励大に為さんとする大志を有し、不屈不撓の忍耐ある健児は速やかに米に渡れ、米の天地は自然の金庫なり、其門扉は諸氏の来りて開くに委しあり」^③

「米國は労働賃金の高価なること日本に比較すれば殆んど十倍余に當るがゆえに先づ日本人に適當せる働きに就て其給金を貯蓄した後何れか自分に相應せし事業を始めるを金儲けの上策とす、尤も成否遅速は其人々の忍耐勤勉の如何に因るなり」^④

「北米は確かに空拳赤手の徒の行くべき處で、三年も死んだ氣になつて働けば労働していても千や二千の金を持って帰られる、夫れだから、帰つて来た者等は、無暗に札ビラを切るのだ」^⑤

「野暮な話だが日本円に換算すると四十円以上である。四十円の月給取となると日本では大したもの。然るに米國では此ハウスワークを以て、語に通ぜぬ労働者の市内労働中最も給金の少ないものと極めて居るのだ」^⑥

こういったイメージの強烈さは、当時の移民論・殖民論全般にも反映し、「未開國は有資者の活動舞台」・「文明國は無資者の活動舞台」^⑦といった認識は共通のものとなつていたし、また、移民といへば、「白哲優等の文明國に向」^⑧うと、まず第一に連想するほどだった^⑨。こういったイメージが現実感をともなつていたがゆえに、そこに、出稼ぎの海外送金は外資導入の捷徑、いつてみれば、日本の貧しさがアメリカ文明の豊かさの恩恵にあずかる、といった発想の國富策のイデオロギーが、容易にかぶせられたのである。つまり、金のなる木のある國への出稼ぎにイデオロギーがあたえられたのである。渡米論者の多くが社会問題に強く関心をもつものか実際に運動家だったことを考えにいれて、よくいえば、そこに、渡米論者の日本の貧しさとせつばつまった出稼ぎへの痛切な思いが、反映していたといえなくもない^⑩。この出稼ぎ論と、つぎのような殖民論を同一線上に結びつけて論じたのが、渡米論のイデオロギーだった。

「(出稼ぎでも著しい経済的貢獻をしている、まして定住して—立川)新日本を太平洋の彼方に形成するに至らば、啻に彼等個個の幸福のみならず、一朝國家事有るに方りては経済財政の為に有力なる一支柱たるべきことは彼等現在の傾向を以て之を推すに必ずしも空中樓閣の説に非るなり、苟も経世経國の志ある者、豈此の点に留意せずして可なからんや」^⑪

「移民の到る所各自財を得るの傍ら新智識を修めつゝここにいと気楽なる自由の新故郷を成すを得、ことにその国旗の赴きたる所は正に是れ国家が膨脹したるもので一國の勢力これがために張り通商貿易これがために進み彼の外資の如きは敢て需めずに自ら流れ来るのみか、これと同時に本国に残れる国民もために各々其所に安んじて裕に生活の樂を享くることを得、是に於てか一國繁榮の基礎はいよいよ安全鞏固たるべきは……」¹⁴

この渡米論のイデオロギーの現実感を支えるうえで、もう一つ欠くことのできなかったのが、沃野千里の豊かな大地が日本人の開拓をまわっている、といったイメージだった。たとえば、つぎのように。

「米國は人口少なく土地広く沃野千里牧畜家禽群をなし肥田萬頃麦畑草木園数十里に列ると云う景況なり、目下は殆んど開墾四方に普及したりと雖も尚ほ採捨すべき遺利多々益々吾人をして幸福の域に進ましむるに足る」¹⁵

「北米太平洋岸殊にカリフォルニアの地は氣候温和天府潤沢真に宇内福德の府というも敢て過言にあらず……千里の沃野茫茫として遠く地平線に連なり、豊饒無比の土壤耕すに人無くして、空しく狐狸栗鼠の跳梁するに任せ、何人か来りて之を開墾せんことを待てるの切なるや、其對手の白人たり黄人たり赤人たり黒人たるの別は意とする所にある」¹⁶

「若し躊躇苟安を事とせば米國天与の宝庫は遂に欧州国民のために先鞭を着せらるゝに至らんとす、有為の青年須らく彈丸黒子の小天地を去つて自由の棲処を海外に求め大いに太平洋の彼岸に猛進すべし、縦令東洋のセツル・ローズたること能わざるも内地において月給取りに齷齪たらんよりは海外における大和民族膨脹の先驅者となるは男子の大快事にあらずや」¹⁷

「白人にして日本人の移住を拒絶するが如きあらば二十年や三十年の間に太平洋沿岸の天産を充分に利用することは出来まい。当分日本人に取りて西部米國程善い移住地はないのである」¹⁸

「大和民族が発展すべき最良の大陸なる北米合衆國」、そして、「大和民族は日米兩國の利益の為に盛んに移住せざるべ

からず」、というわけである。ここまでくると、渡米論者は、フロンティアの開拓に参加してアメリカ国民となれる、と無邪気に信じていた、いや信じたがっていたかの様相を呈していたといえなくもない。この無邪気さは、歴史的にみれば、最終的には一九二四年の排日移民法で打ち砕かれてしまったのだが、当時においても、日本人、というよりアジア人が、アメリカ国民たることを拒絶されていることは、みようとすれば、充分すぎるほどみえたはずである。そういった意味で、この無邪気さは屈折したものであったが、表面上は、その無邪気さのなかで、「駒馬を出でて二十年今じゃテキサス大地主秋や小鹿の鳴くころは黄金の波が九万町」と唱われたテキサス米作の数々の計画が立案されただけでなく、その多くが、片山潜や吉村大次郎ら渡米論者のチャンピオンも含めて、実行に移された。また、「渡米せよ渡米せよ太平洋の彼岸に新日本を建設せよ」といったカリフォルニア農業殖民も声高に叫ばれた。そして、日露戦後になると、渡米者(在米日本人)のカリフォルニアを中心とする農業分野への著しい進出を反映して、労働者時代から独立事業・資本の時代に入ったと、さかんに唱えられた。

このように、アメリカ移民論・殖民論は、本気で論じられ、現実感をおびて最も人々の関心をひきつけたものだった。移民論・殖民論の系譜を考えると、明治期の渡米論は欠いてはならないのである。

こういった移民論・殖民論としての渡米論の現実感を奪い、ついには引導を渡したのが、日露戦後の日本人移民排斥運動の激化からその外交問題化、そして、明治四一年の紳士協約による事実上の渡米禁止という情況だった。ここで、渡米論者の間でも、南米移民論が浮上してくるのである。片山潜も、二大渡米奨励・情報雑誌『渡米新報』・『亜米利加』も、移民論・殖民論の矛先を、アメリカから南米へ転換させようとした。たとえば、つぎのように。

「北米移民は外交手腕の拙劣なる結果一太頓座を来し今や折角好殖民地たる根基を据へたる北米太平洋沿岸の殖民事業は停滞の有様となり新に日本人の入口は我当局の如何なる心配によりしてか不許可となるに至れり、今後我國民は他に發展を求めざるを得ざる運命となれり……吾人は我青年が一大決心を以て渡航して南米の天地に其活動を試みん

ことを望む」^⑧

いや、渡米論者にとどまらず、日露戦争後の南米移民論の台頭それ自体が、渡米の道が閉ざされつつあったことから、もたらされた部分が大きかったように思う。つぎの言葉は、それをよく表わしているだろう。

「北米合衆国に対して、労働者の自由渡航一度禁止せられしより以来我国に於ける海外渡航志望者の眼は、一切南米の天地に向って馳せたり」^⑨

だが、南米移民論では、多くの読者を獲得できなかった。南米移民、もっといえば、一般的な移民奨励・情報雑誌への転換をはかった『亜米利加』・『渡米新報』は、明治四一年半ばをすぎる頃から、目にみえて読者が減り始め、『渡米新報』は翌明治四二年三月、『亜米利加』は同年五月、停刊に追いこまれたからである。^⑩ また、片山が、新たに明治四〇年一月に発刊した『渡米』も、明治四一年三月までしか発行できなかった。^⑪ さらに、成功雑誌社から移民・殖民奨励雑誌として、明治四一年五月から発刊された『殖民世界』も、五号程度で停刊になったようである。渡米に結びつかない移民・殖民奨励・情報では、月刊雑誌を継続できるほどの購読者はえられなかったのである。明治三〇年代から明治四〇年代にかけては、移民論・殖民論を多く売るためには、それが、渡米論、稼げて学べて洋行帰りといったイメージと結びついていることが、条件だったのである。ここからも、2でふれたような苦学生タイプの渡米希望者が、渡米奨励本や雑誌の読者層だったといえると思う。

紳士協約が威力を発揮し始めた明治四一〜二年を境として、渡米奨励本や雑誌が多くの読者を獲得できるといった形での渡米熱は、終わったのである。

稼げて学べて洋行帰り、機会と成功のアメリカといったイメージや、外資導入・殖民地建設といったイデオロギーなど、出稼ぎ者にとって、どうでもよかったかもしれない。もっといえば、アメリカに嫌悪・反感をもっていたとしても、現在のじゃばゆきさんのように、したたかさやいかわしきをもって、金が稼げるならと渡米しただろう。苦学生の渡米にし

でも、単にアメリカへの憧れだけと結びつけられない、せっぱつまった表情がそこにはあったろう。したがって、ここで述べた移民論・殖民論や2でふれた苦学生天国論も、渡米論者のいい気な発言だったといえなくもない。わたしは、渡米論は、いつもその趣きでもって語られていたといいきってしまっ、いいのではないかと思っっている。だが、そうはいっても、このいい気さを、物見遊山の旅行者の法螺や自慢話といった類いのものと片ずけてしまえない何かも、そこには含まれていた。つぎでのべるように、このいい気さのなかに、たえずアメリカへの屈折した思いが見えかくれしていたからである。

- ① 明治一〇年代後半から明治二〇年代初めにかけての渡米奨励本、ドイツ・イスタール原著富田源太郎・大和田弥吉訳『米国行独案内 一名桑港事情』丸屋善七発行 明治一八年、周遊散人原著 石田隈次郎編撰『米れ日本人 一名桑港旅案内』開新堂 明治二〇年、武藤山治『米国移住論』丸善書舗 明治二〇年、福岡照編『起業立志之金門 一名米行者必携』日新堂 明治二〇年等は、そもそも移民論・殖民論として登場したものだった。明治三〇年代の渡米論は、その延長線上にもあったのである。
- ② たとえば、前掲在米日本人会編『在米日本人史』五四〜八頁、前掲鶴谷寿『アメリカ西部開拓と日本人』三五〜八頁。一柳松庵『渡米之稗』明治三四年のように、渡米奨励本のなかにも鉄道工夫の求人広告を掲載したものもあった。
- ③ 前掲飯島栄太郎『米国渡航案内』七頁。
- ④ 前掲渡辺四郎『海外立身の手引』一頁。
- ⑤ 木村竹葉『新渡米案内』盛光堂 明治三八年 一三頁。
- ⑥ ワイ・エム生『市内米園労働 其二』並米利加』第一年第七号 明治四〇年七月一日。
- ⑦ 前掲木村竹葉『新渡米案内』自序。
- ⑧ たとえば、『成功』では、「余は実業者として成功を望むものなるが、渡米渡清渡韓の何れを選ぶべきや」といった読者の質問に対しては、「米国は労働の賃金高し清韓は非常に安し故に無一物なれば米国に渡航すべく資本あれば清韓に渡航して農工商の業を企つをよしと信ず」〔記者と読者〕第四卷第五号 明治三七年五月一日〕といったように回答するのが常だった。
- ⑨ 新渡戸稲造序文 大河平降光『日本殖民論』文武堂 明治三八年 四頁。
- ⑩ 「誰しも渡航する以前に於ては、海外と云えば直ちに文明繁華を予想し、上陸直ちに大厦高樓軒を並べ、車馬の往来繰るが如く、秩序整然設備完全たるの如く想見する者多からんも、そは大問題なり」〔村上忠次郎』有望なる移民地』海外移民通信案内所 明治四四年 一三頁〕
- ⑪ 片山潜・島貫兵大夫・安部磯雄・奥宮健之はいまでもなく、吉村大次郎もかつては大阪事件で有罪判決をうけた自由民権運動家、山根悟一は国家社会党员である。
- ⑫ 吉村大次郎『渡米成業の手引』岡島書店 明治三六年 二七頁。
- ⑬ 前掲一柳松庵『増訂渡米之稗』四頁。
- ⑭ 前掲渡辺四郎『海外立身の手引』一一頁。

- ⑮ 前掲吉村大次郎『渡米成業の手引』七頁。
- ⑯ 相島勘次郎・佐藤政治郎『改訂渡米のしるべ』岡島書店 明治三六年 改訂の序三頁。
- ⑰ 安部磯雄『北米之新日本』博文館 明治三八年 三七頁。
- ⑱ 『渡米新報』をかく改めし理由』『渡米新報』第六年第一号 明治四一年一月一五日。
- ⑲ 明治四一年頃、大流行したといわれる農科大学生の喇叭節（『亜米利加』第二年 第一一〇号 明治四一年一月一日）。
- ⑳ 隅谷三喜男『片山潜』東京大学出版会 昭和三五年 一五二―八頁、吉村大次郎『日本人の新富源 北米テキサス州の米作』岡島書店 明治三六年、外務省通商局『北米合衆国テキサス州米作調査報告書』明治四三年、入江寅次『邦人海外発展史』上巻 下田書店 昭和十一年復刻版 原書房 昭和五六年 四八三―六頁、『日本外交文書』第三八卷第二冊 自明治三八年一月一日至明治三八年十二月三十一日には、「明治三八年三月四日清樸和歌山県知事ヨリ石井通商局長宛」に「テキサス」行農業移民渡航許可ノ範圍問合ノ件（三四四―五頁）といった報告が数多くみられる。
- ㉑ 北沢寅之助・成沢金兵衛『新撰渡米案内』博文館 明治三八年の宣伝文（『成功』第八卷第六号 明治三九年四月一日所収）
- ㉒ 前掲安部磯雄『北米之新日本』や『亜米利加』、そして『渡米新報』がその代表である。
- ㉓ たとえば、吉田猛志「加州農園と日本人の欠乏」『亜米利加』第一一年第一〇号 明治四〇年一〇月一日、竹崎厚吉「在米同胞の成積」『亜米利加』第二年第三号 明治四一年三月一日。
- ㉔ 排斥運動の激化から紳士協約までの推移については、Roger Daniels, "The Politics of Prejudice", The University of California Press, 1962, pp. 24-45, 詳し。
- ㉕ 片山潜「南米の未墾領土」『成功』第二卷第五号 明治四〇年六月一日。
- ㉖ 有磯逸郎（横山源之助）『南米渡航案内』成功雜誌社 明治四二年例言。その他、前掲大河平降光『日本移民論』二七四―八頁、盛文社編輯部編『海外立身案内』盛文社 明治四四年 六頁、でも同様のことがのべられている。
- ㉗ 紳士協約実施後の力行会は、「力行会の如く苦学生乃至は中学卒業程度の青年を渡米させていた者は致命的の打撃を受けるに至ったのである。青年が集まらなくなって来ては伝道の仕事も出来なくなり、会の運営も困難にな」るほど窮状におこまれた（前掲『財団法人日本力行会創立五十年史』三三頁）。
- ㉘ 四月から『日米経済新報』として発行されたようだが、七月―九月休刊、一〇月から『社会新聞』のなかの「渡米案内」欄となった（第四八号 明治四一年一〇月一〇日）。その後、実質的に南米案内の趣を濃くしながら、断続的に続いたが、ついに、第七二号（明治四三年一〇月一五日）で、つぎのような、この時期の北米移民論から南米移民論の転換を象徴する記事でもって、消失した。
- 「現時労働者の北米に渡航することは嚴禁してある。学校視察員商人芸人等は渡米することが出来る。労働者でも加那太及南米には渡米することが出来る。メキシコ国も有望である。南米はブラジル及アルゼンチンが一番有望である。コロンビアも有望であるが我政府は反対らしい。吾人は続々と有為の青年が南北西米に渡米して大発展することを望む」

ここまでできたならば、明治三〇年代から明治四〇年代にかけての渡米論を、まとめることができるだろう。まずは、稼げて学べて洋行帰り、といった苦学生の天国論である。ついで、赤手空拳から大富豪・大統領にもなれる機会と成功の社会、といったアメリカのイメージである。さらには、外資導入の捷徑・殖民地の建設、といったイデオロギーである。そして、何よりも、金のなる木のある国、といったイメージである。立志成功は、日本よりはるかに可能性が高い、アメリカに限る、というのも渡米論が伝えたメッセージだった。いいかえれば、これらが、渡米論のなかでの、アメリカン・ドリームだったのである。

このような渡米論が人々の関心をひき、先にみたようにアメリカが流行したことは、アメリカへの親近感や明るく開放的といったアメリカのイメージが、明治三〇年代、日本のなかにそれなりに浸透していったことの例証ともなる。その後の大衆文化としてのアメリカ文化の流入の土壌が作られたともいえる。後年、高木八尺に代表されるアカデミズムがとらえたアメリカが、ピュリタニズムとフロンティアであったとするなら、^①これらが、明治後半期の渡米論がとらえたアメリカだったのである。この渡米論の背景には、苦学生や出稼ぎの存在があったといえるだろう。

だが、さまざまな個性はもっていたにしろ、ここまでみてきたような画一的なステロタイプの渡米論やアメリカのイメージを額面通りにうけとっていいのか、そうすると、何かを欠落させてしまうのではないかという問題は、まだ残っているのである。つまり、わたしがここでいいたいのは、先にもふれたように、渡米論やアメリカのイメージは、渡米論者の在米体験を、アメリカへの屈辱感や劣等感、そしてそれらを色濃く反映した反発を、密封したり棚上げしたうえでなりたっていたことである。

それらを露出させてくれたのが、アメリカにおいて、日露戦争後激しさをくわえた日本人移民排斥運動や黄禍論・日米

戦争論だった。^②これにつつきだされて、渡米論者の手になる日米未来戦記物が登場してきたのである。一九一〇年代の日米未来戦記物が、日本の軍事力や軽佻浮薄とみえた時代風潮への驚世的意味あいでも書かれたことは、佐伯彰一が指摘するところだが、^③他ならぬ渡米奨励・情報雑誌『亜米利加』に掲載された生田目旭東（貞次郎）の「太平洋上の双龍」（第二二年三月〜九月）は、そのモチーフを異にしていた。建国の精神を忘れ、帝国主義政策をとり、理不尽に日本人を排斥・虐殺する、傲慢無礼のアメリカを、正義の日本が打って大勝利をおさめ、将来の黄白人種戦争に備えるといった筋立をとったのである。著者生田目は、日本人移民排斥運動についてよく調べており、他の論考からみて、したたかな在米体験をもち、どちらかといえば、親米家といってよかった。^④「太平洋上の双龍」は、排斥運動で、アメリカに裏切られ傷つけられたという思いから書かれた分だけ、アメリカ打つべしが前面にでたのである。『亜米利加』は、あるドイツ人によって書かれ、当時ヨーロッパで評判だった日米来来戦記『パンザイ』も、抄訳で明治四一年一〇月、いち早く紹介した。^⑤さらに『亜米利加』は、排斥運動が、日本を劣等視した人種偏見以外の何物でもなく、^⑥アメリカの自由平等門戸開放といった理念の欺瞞性を明らかにしている、^⑦アメリカは東洋の覇者たらんと帝国主義政策を推進するために排斥運動を日米外交の取引材料としている、^⑧といった論稿も掲載した。力行会でも、「日米戦争の可否」が討議された。^⑨そして、在米日本人のグループによって、明治四五年アメリカで発行された『母国へ』という本では、ほぼ全編にわたって、日本人（アジア人）移民排斥への激しい怒りが前面に打ちだされ、「世界の日本化」が叫ばれていた。^⑩いずれもが、それまでは、封じこめられていた屈辱感や劣等感、そして反発が、排斥運動を機に裏返されて、アメリカへの敵愾心となって露出されたことを示しているだろう。このことは、安部磯雄の『北米之新日本』^⑪や、片山潜の明治四〇年以降の渡米論のなかでも、^⑫ときおり顔をのぞかせていた。

とはいえ、このようなアメリカ打つべしアメリカ憎しといった反応は、当時としては、極論の部類に属するものであった。全般的な傾向としては、排斥運動に対する当惑や反感をにじませながらも、排斥運動がおこっているのは、渡米者（在

米日本人)がゴロツキやくいつめ者だからであり、しかもそれは、白人の下級労働者とそれに迎合する一部政治家の煽動にすぎない、といった論調が圧倒的に多かった。白人の下級労働者と一部政治家の煽動という見解は、かなり実情を反映していたといえなくもないが、ここで問題としたいのは、渡米者(在米日本人)が、ゴロツキやくいつめ者だから排斥運動がおこったとする心的機制である。

もともと日本では、あらゆる意味での出稼ぎへの視線は冷たいといえるが、渡米者に対しては一段と冷たかった。在米外交官は、渡米者が漸増し始めた明治一〇年代後半から、終始一貫として、渡米者を「出稼ぎ労役シ白人ノ嫌悪ト国辱ヲ買フニ及ブ間敷ト奉存候」、といった類いのイメージで報告しつづけていた。^⑭ 中国人排斥運動の歴史が日本人のうえにふりかかることを恐れたとともに、日本や日本人を生む姿でさらすことを恥だとする意識があったところに、少しでも日本人排斥の動きがあれば、過剰に反応するといった構図だった。それは、強迫観念といってもよかった。また、アメリカ紀行といった類いのものなかでも、渡米者をゴロツキやくいつめ者の無頼感のあつまりだとする、渡米者像がひんばんに登場していた。^⑮ すでに明治三〇年代には、実体とは関係なしに、渡米者のイメージが形成されていた要素が大きいのである。渡米論のなかにも当初からひんばんに登場した、つぎのような渡米者像は、いつてみれば、ステロタイプだったのである。

「此多教者(労働者)は、大概教育不十分なる人物にして其服装拳動総て粗野なるを常とし、或る者は不体裁極まる日本服を纏い得意然として欧米人の前を濶歩し、甚しきは衣裳をまくり上げて腿脚を露出する如き夏季裸体となる如き全く野蠻の陋風を演ずる等の者あれども、此等は只に自己一身の耻に止らず延て日本人全体に迷惑を及し国家の耻辱となるのみならず米人よりハ最下等労働人と見下げられ……」^⑯

ここにある意識は、在米外交官と同じく、欧米人からみたら生の日本人は軽蔑劣等視されるにちがいない、といった強迫観念に他ならない。ここから、渡米者がゴロツキやくいつめ者の無頼感だから排斥運動がおこった、したがって、「文明

的労働者の良風を学べば今後排斥の声は聞かざる有様となり資本家の大顧客に至るは亦教を疑う所にあらざるなり」とか、
 相応に教育ある良民が移民すれば排斥をうけない、といった発想がとられたのである。スペイン・イタリアといった二等
 国民以下の取り扱いをうけるいわれはないといった屈折した意識や、日本の経済力・国力が増せば排斥は止むといった意
 識^②も、これらと同様のものだったといえよう。ゴロツキやくいづめ者だから排斥をうけた、アメリカ風を身につければ、
 相応に教育ある良民を渡米させれば排斥をうけないといった発想は、日本人へ示された生理的嫌悪や侮蔑を前にして、そ
 こでの屈辱感や劣等感、そしてそれへの反発を、渡米者の質の問題にすることで、封じこめたり棚上げしようとする心的
 機制が働いていたことの、何よりの例証だと思える。このように考えるならば、この心的機制は、アメリカ打つべしアメ
 リカ憎しといった直接的なものより屈折してただけに、それだけ一層はつきりと、先にみたような渡米論やアメリカの
 イメージが、アメリカへの屈辱感・劣等感や反発を密封したり棚上げしたうえで、形作られていたことを示しているとい
 えよう。また、このような心的機制が、その後も引き続いた日本人移民排斥運動とともにさらに強くなり、くいつめ者の
 ふぎだまりといった渡米者（在米日本人）像を一層定着させ、たとえば、商社マンたちが在米日本人をローカルの人と呼
 んで見下げることにも、つながったと思える。

日露戦争後のアメリカにおける激しい日本人移民排斥運動や黄禍論・日米戦争論の声高な叫びは、アメリカを味方にな
 ってくれる頼もしい国と思っていた少年期の木村毅を悲しませ、佐伯彰一が指摘するように「肉親関係（長幼叔姪—立川）
 の比喩であらわされるような、素朴な信頼、親近感の対象としてのアメリカのイメージ……から、一転して「仮想敵」の
 イメージを生じさせ、そしてまた日米間の深刻な外交案件ともなったことで、日本におけるアメリカのイメージを転換
 させる一大契機となった。それとともに、わたしがここで論じたように、アメリカへの信頼、親近感のなかに封じこめら
 れていたり棚上げにされていた、屈辱感・劣等感や反発を露出させる契機ともなったのである。本間長世は、一九三〇年
 代の動向を念頭において、「アメリカの文明について理論化を試みようとする時、結果として生まれるアメリカのイメー

ジは非常にしばしば否定的である」とのべている^⑧。もしそれがあたっているとすなら、理論的につめていくと、アメリカの文明の真髄として、日本ではいわば密教の、拜金宗（功利主義・利己主義）を抽出してしまうことともに、感情的な部分で、ここでみたようなアメリカへの屈辱感・劣等感や反発にいきつくこともその要因だったように思う。わたしは、日露戦争後の日本人移民排斥運動などに対する反応のありようは、その後、アメリカにおいて反日感情が高まったとき、日本の側でひきおこされる反応の原型を、ここにみせていたように思える。

- ① 斎藤真「アメリカ研究」『アメリカ精神を求めて 高木八尺の生涯』東京大学出版会 昭和六〇年 二二二～二三五頁。
- ② 日本人移民排斥運動に関しては Roger Daniels: "The Politics of Prejudice", pp. 24-45. 前掲若槻泰雄『排日の歴史』五四～九頁 六二～八四頁。黄禍論・日米戦争論に関しては、橋川文三『黄禍物語』筑摩書房 昭和五年 五八～八四頁、仮伯彰一「仮想敵としてのアメリカのイメージ」加藤秀俊・亀井俊介編『日本とアメリカ 相手国のイメージ研究』日本学術振興会 昭和五二年 一八五～一九四頁。
- ③ 前掲佐伯彰一「仮想敵としてのアメリカのイメージ」加藤秀俊・亀井俊介編『日本とアメリカ 相手国のイメージ研究』一九九頁。
- ④ たとえば、生田貞次郎「米国情情（其の一）（其六）」『亜米利加』第一二年第四号～第九号 明治四一年四月一日～九月一日。
- ⑤ 「日本勝つか米國勝つか（独逸人の架空小説）」『亜米利加』第一二年第一〇号 明治四一年一〇月一日。この『パンザイ』については、前掲橋川文三『黄禍物語』六八～九頁 七二～三頁に言及がある。ただし、この『亜米利加』での紹介についてはふれていない。
- ⑥ 矢部八重吉『Emigration Problem in Japan』『亜米利加』第一一年一号～二二号 明治四〇年一月一日～二月一日。
- ⑦ 吉田東涯「太平洋上に於ける亜米利加の勢力」『亜米利加』第一一年一二号 明治四〇年一月一日。
- ⑧ 一二号 明治四〇年一月一日。
- ⑨ 原健衛「日米外交問題」『亜米利加』第一二年第五号 明治四一年五月一日。
- ⑩ 『渡米新報』第六卷第七号 明治四一年七月一日。
- ⑪ 渡辺久克編『母國へ』在米日本人叢書第一卷 日の本商会 明治四五年。
- ⑫ 前掲安部磯雄『北米之新日本』九三～四頁。
- ⑬ たとえば、片山潜「日米問題の終局」「吾人の策如何」『社会新聞』第五五号 明治四二年五月一日。
- ⑭ 「明治三三年六月一日在桑港天野誠一ヨリ青木外務大臣宛 北米合衆國及加那陀地方へ労働移民制限ニ付建白書」『日本外交文書』第三三三卷 自明治三三年一月一日至明治三三年二月三十一日 四五六頁。
- ⑮ こういった報告の明治一〇年代半ばから明治二〇年代半ばまでの経緯が、その論稿の本来の主旨ではないが、Donald Teruo Hata Jr., "Undesirables Early Immigrants And the Anti Japanese Movement in San Francisco 1892-3 Prelude to Exclusion", Arno Press A New York Times Company 1978. のなかで詳しくふれられている。
- ⑯ たとえば「海外日本労働者」『労働世界』第四四号 明治三三年九月一日、中小路廉『歐米巡遊雜記 米國之部』明治三三年 一二～

三頁、渡辺四郎『ハワイアメリカ出稼出世の宝』明治三四年 六〇頁、吉村大次郎『最近視察苦学生の天国 青年の渡米』中庸堂 明治三五年九頁、山村四郎『米国太平洋岸に於ける日本人』『社会主義』第八年 第七号 明治三十七年五月三日等参照。

⑮ 前掲渡辺四郎『海外立身の手引』一三頁。

⑯ 奥宮健之『北米移民論』明義舎 明治三六年 五三〜四頁。

⑰ 松平正直『善良なる移民を作るには監督局の新設を要す』『商工世界太平洋』第五卷第二三号 明治三十九年一月一日。こういった発想は、とりわけ力行会にみられたものだった（たとえば、東海（島貫兵太夫）『渡米者の三大準備』『渡米新報』第六卷第四号 明治四二年四月一日、島貫兵太夫『新渡米法』博文館、明治四四年 一〇〜二二頁）。

6 おわりに

明治期において、誰もが、まとまった外国のイメージを抱いていたわけでもないし、毎日外国のことを考えて暮らしていたわけではないだろう。条約改正や日清・日露戦争といった状況においては、外国が日常生活のなかに入ってくるのはうなずけるが、そうでない状況で、アメリカが流行すること自体、こちら側に、それを求めるよほどの自発の契機がなければならなかったはずである。しかも、それが、明るく魅力的なイメージをもっていったようにみえるならば、なおさらそうである。それは、奇妙な風景だろうし、どこに根拠があるのかを探りだすことは、何がしか、当時の日本の社会状況を照らしださないわけでもないだろう。なぜなら、そこには、日本の社会状況が倒錯され、そしてまた、アメリカへの屈辱感や劣等感、反発が封じこめられていたからである。

したがって、もちろん一方的に、本論でみたような渡米論やアメリカのイメージだけが、ふりまかれていたわけではなく、

⑱ たとえば、前掲奥宮健之『北米移民論』四六頁、前掲島貫兵太夫『新渡米法』二一六頁。

⑲ たとえば、前掲一柳松庵『増訂 渡米之業』二二頁。

⑳ 前掲伊藤一男『続北米百年桜』三三六頁。

㉑ 木村毅『明治アメリカ物語』東京書籍 昭和五三年 二一〜二頁。

㉒ 前掲佐伯彰一『仮想敵としてのアメリカのイメージ』加藤秀俊・亀井俊介編『日本とアメリカ 相手国のイメージ研究』一九一頁。

㉓ たとえば、入江昭『日本人の外交』中公新書 昭和四一年 五六〜七頁。

㉔ 本間長世『日本文化のアメリカ化』細谷千博・斎藤真編『ワシントン体制と日米関係』東京大学出版会 昭和五三年 六二六頁。

それを打ち消す情報も多くもたらされていた。たとえば、渡米者の多くがゴロツキになり、ジャップ・スケベと蔑視されて日本の恥をさらしているとか、たとえ苦学が成功してもホテルの通訳ぐらいが関の山だとか、アメリカは拝金宗だけで文化的に見るべきものはない、といったものが、ほかならぬ渡米論のなかで強調するものがあるほどいぎわたっていた。^①

『渡米新報』・『亜米利加』は、毎号のように、渡米目的を明確にもたなければ墮落し排斥をうけるといった、修養論を強調しなければならなかった。そして、政府の、国の体面を汚し外交的にも厄介者となるとの厳しい渡航制限を筆頭に、渡米論は無垢の青年をあおりたててゴロツキを作りだしている、「青年よ、帝国主義者の口車に乗り、渡米奨励論者の言に欺かれて、米国を世界の楽土―成功の魔国なりと誤信すること勿れ、米国も亦資本家の国たるなり」、^②といった類いの渡米反対論も、渡米熱の高まりとともに、とりわけ日露戦争後は、強まった。

だが、悲観的な渡米情報やだまされるなどといった類いの渡米反対論は、渡米熱を外からの煽動、誰かにそのかさされたものだ、と考えていた点で的はずれであった。渡米論やアメリカのイメージが幻想をふりまいていたのでなく、日本の社会状況がその幻想を生みだしていたからである。いかえれば、渡米論やアメリカのイメージは、社会状況にふりまかかれて、作りあげられていたからである。したがって、明治後半期の渡米熱をみると、結局は、アメリカかぶれのオメデタイ風潮だったかの様相を呈している。いい気な考えやエゴイスティックな野心を、あるいはせつばつまった苦学生や出稼ぎの表情を、社会主義者やコスモポリタンの表情を、ついでに渡米熱を利用しようとする商売気をも、渡米熱の動向からは読みとれるわけである。

だが、このオメデタサも、日本でのものではしかなかった。

「労働では最もハードな大根のマビキで中々に骨折れ申候、腰の痛み手の疲れる事二三日は大弱りになりて困りしも
最新昨今は慣れて参りまして左様の苦痛を憶えず一行中会員（力行会員―立川）で明石順三君は敗戦して華村に帰り
予と細井氏に岡氏三名互いに励みて日々二円位の仕事に楽しみ居る有様です……」^③

これは、渡米直後の明石順三の消息を伝えたものだが、渡米者がどのような個性をもっていようと、渡米後は排斥にさらされての出稼ぎの生活をしいられるのが、おきまりのコースだった。アメリカのイメージと渡米の動機を何らかの形で結びつけるなら、その断絶のなかに身をおかねばならなかったわけである。つけは、いつでもどこでも、自分に回ってくるものである。だが、そのつけは、明治後半期の渡米論者のように、浅薄な形で回収されたわけではなかった。明石順三・清沢冽・翁久允のように、アメリカで鍛えられた個性が、アカデミズムなどよりはるかに重量をもったアメリカを、したがって日本を語り、渡米者（在米日本人）が、いかがわしさやしたたかさを充分發揮して、強靱にアメリカ社会で生き抜いたことは、我々のしるところだからである。ようするに、渡米論やアメリカのイメージとは、異なったところで、渡米者（在米日本人）は生活をしいられたのである。明治後半期の渡米論やアメリカのイメージが排除していたのは、このような渡米者（在米日本人）にとってのアメリカ、アメリカ国民たることを拒絶されていた日本人にとってのアメリカ、だったようにわたしには思える。

- ① たとえば、和田方吉「桑港より」『苦學界』第一五号 明治三五年五月二〇日、赤羽生（赤羽一）「桑港警見記」『六倉雜誌』第二七〇号 明治三六年六月一五日、「渡米案内（新渡米者の米信）」『社会主義』第八年第三号 明治三七年二月三日、井上敬次郎「米圃に来る勿れ 故国青年の渡米熱を排す」『新公論』第二年第一〇号、第一一号 明治三九年一〇月一五日、一月一五日、梅田又次郎『在米の苦学生及労働者』実業之日本社 明治四〇年 一四〇二頁 一五八〇九頁。
- ② 『雜誌警見』『光』第一卷第二号 明治三九年九月一五日。
- ③ 木村米太郎「ガタローフ通信」『渡米新報』第六卷第六号 明治四一年六月一五日。ちなみに、ここに登場する細井（藤兵衛）は、黒岩涙香の玄関番のとき、「北米合衆國に渡航すれば、一日三四時間の労働に依って、大学校迄哲学をする事が出来る」と聞いて渡米を決意、力行会に入会したという（永田稠『海外立志伝』日本力行会 大正一五年五八頁）。

and the assurance of the high posts to successful candidates made a great number of intellectuals. Among the intellectuals, the *juren* 舉人 and the *shengyuan* 生員, who didn't have any post, were distinguished from the officials (literati, *shidafu* 士大夫) and the common people, and they were called the *shiren* or the *shizi* 士子. They were considered as the class next to the officials in the *xiangli* 鄉里 society. And so, the hierarchy was formed in which the *xiang quan* 鄉官 and the *jiju* (temporary lodging) *quan* 寄居官 were the first, the *shiren* the second and the common people the third.

The *shiren*, who were aware of the importance of their own status and considered themselves the intelligensia, *shi* 士, maintained leadership in the solution of the problems of the society. But on the other hand, they made use of their status to get their own interests. The position of the *shiren* was not only the social one but the legal one. Because the *juren* and the *shengyuan* took some advantages in the laws on corvée and the criminal laws. Especially the qualification of the *juren*, which was only temporary in the examination system, was valid for life in their laws. Besides, not only the *juren* and the *shengyuan* but all the *shiren* received favorable treatments in the court. In the national system or in the *xiangli* society, the character of their governing classes was getting clear.

“To-Bei” (Going to America) Boom in Late Meiji Era

— American Fever —

by

Kenji Tachikawa

From the latter half of the thirties to the forties of Meiji Era, many Japanese were interested in going abroad to America and many of them actually did so. A variety of books and leaflets were published to encourage their going to America, organizations promoting the trend such as *Tobei-kyokai* (渡米協会) or *Rikiko-kai* (力行会) were getting more active than ever and a considerable amount of information concerning America was on newspapers and magazines. Such palatable phrases as

“America; the best country for emigrants!” or “there you can surely make money and study and would be called *Yokogaeri* (a prestigious title given to a returnee from the West)” were repeatedly on the lips of the people and attracted their attention. In the influx of success stories at that time, they made a hero of Roosevelt or Carnegie and the image of America as the land of equal opportunity, where anyone can hold success by means of his merits and abilities, prevailed. But the favorable image of America and the American Fever reflected in a perverted way the frustration felt by Japanese and the oppressive and stifling atmosphere of the Japanese society. From another point of view, it can be said that a sense of inferiority, humiliation and covert resentment against America were sealed up in the American Fever. It was the rise of the Anti-Japanese-Movement and the Yellow Peril after the Russo-Japanese War that disclosed the back side of the American Fever in Japan.